あるむぜお83

府中市郷土の森博物館だより　al museo NO. 83　2008年 3月20日

上：開館以来の主な特別展
下：直近の特別展

目次

1-2 はたちの思い出 その4
展示と展覧会

3 展示会案内
岩合光昭写真展 パンダの季節

4-5 ノート　江戸時代行路行倒人事情

6 収蔵庫のニューフェース

7 最近の発掘調査
解明進む国司の館

8 展示室リニューアルトピックス　⑧

はたちの思い出

hop! step!

展示と展覧会

馬場治子

その4

郷土の森博物館が、既成の考え方にとらわれず「新しい博物館をつくろう」という合言葉で構想され、実践されてきた事は、この「はたちの思い出」の連載でお伝えできたと思います。

たとえば、復元建物の街角で時折大道芸が披露されています。何度見ても楽しい芸人さんの周りはいつも大きな人垣です。中でもいちばん前で、口を開けんばかりにして見入っている子どもたちの表情は、小さな子でも真剣な目付きです。

また、広い園内の片隅でアリの行列を見つけた子は、しゃがみこんで巣穴を見つめたまま動こうともしません。

彼らには「博物館でお勉強をしている」という気などまったくありません。しかし、視覚だけでなく、五感を使って「モノ」をしっかりと見、観察することは、理解し、考えることの原点であり、博物館の展示はまさにその延長にあります。そういう意味で、140,000㎡の敷地のあらゆる物が郷土の森博物館の展示品であり資料であるともいえましょう。

とはいうものの、資料の種類や状態によって展示環境を整えなくてはなりませんので、屋内の展示室が展示の中心であることは否めません。

本館内には三つの展示室があります。一番基本になるのは2階の常設展示室。ここは博物館全体の要であり、考古・歴史・民俗・自然の分野の資料を用いて、府中の風土と文化について知識が得られるようになっています。二番目はプラネタリウムに附属する天文展示室です。人間のサイズから離れて宇宙に目を向けることができます。

この二つが、資料の入れ替えはあっても、展示全体の流れは基本的に変わらないのに対し、1階にある特別展示室では様々なテーマの展示が期間を限って開催されます。

開館時の「美術にみる梅」展から先達ての「発掘！府中の遺跡」展まで、毎年2～3本ずつの特別展を開催してきました。常設展示の中で1コーナーしか場所が取れなくても、収蔵庫にある関連資料を比較して見ていただきたかったり、他所の機関が所蔵する品を加えたらもっと掘り下げた内容にできるとか、府中に直接関係しなくても、世界にはこんな面白いことやこんなに美しいものもありますとか、そのテーマは多岐にわたっています。そのことは取りも直さず、この博物館の間口が大変広いということに他なりません。

博物館の展示に何を求めるかも、同じ資料から引き出せる情報も見る人によって違います。「物をして語らしめよ」とは学芸員の基本の心構えですが、これからも「地域」を核に物の言葉を人の言葉に翻訳し、知ることが楽しい、という思いが伝わる展示にしたいと思います。地域を知ることで、より地域に根ざした暮らし方ができる、生活のすぐ隣に博物館が在る、市民生活の中でそんな地位を得られるように、ジャンプの目標を掲げましょう。

博物館ブックレット：2001年からは展示図録もハンディで読み易いことを心がけてきました

展示会案内

5/24（土）～7/6（日）

岩合さんが　写真で　大熊猫を　連れて来る！　パンダ　ぱんだ　ぱんだ

パンダの季節

岩合光昭写真展

大熊猫‥‥中国語でパンダです。
熊のように大きくて、猫のように愛らしいからなのでしょうね。猫と言えば岩合さん、今回は猫は猫でも大熊猫に挑戦です。当館ではお馴染みの岩合光昭写真展があじさいの季節にやって来ます！

大型哺乳類・ジャイアントパンダ
その分類については、長い間議論されてきましたが、最近のDNA研究によりクマの仲間で早期に分化した種であることがわかりました。体長は120～190㎝、体重は85～120kgで、主にタケの幹や葉を好み、時にはタケノコ、稀に昆虫やネズミも捕食します。クマの仲間ですが冬眠はしません。生息数は減少の一途を辿り、最も絶滅の恐れがある哺乳類の一種として、絶滅危惧種に指定されています。

ジャイアントパンダの祖先は、200～300万年前に、北京から中国東部・南部にかけて広く分布していたようです。化石の発見場所は、それ程高くはない場所で暮らしていたことを示唆します。ところが現在は1200～3400ｍの高地に限られています。人間が入り込んだために追われた結果でしょう。現在の生息地は大きく6か所に分断された小岳域に限定されてしまいました。

中国政府は個体数の60%以上を保護するために33か所の保護区を設立して努力を続けています。

四川省臥龍のパンダ保護センターで、世界的動物写真家・岩合光昭さんはそのレンズをパンダに向けました。もっこりふわふわ、ま～るい体で愛くるしい表情や動きを見せてくれる彼らを捉えた力作が揃いました。

世界中を巡りあらゆる野生動物の姿を写し、自然の厳しさや雄大さを伝えて来たキャリアと、どこに行こうと必ずそこの猫を撮り、暖かさと癒しを表現してきた感性が、パンダという新たな被写体を見つけました。

100点以上の作品で会場はパンダ一色です。保護センター設立に提携するＷＷＦ（世界自然保護基金）ジャパンの提供で、パンダに関する情報や解説パネルも同時に展示されます。　（中村武史）

NOTE

花木知子

江戸時代行路行倒人事情

—八幡宿村の場合—

①発見から吟味まで

江戸時代に入り街道の整備が進むと、一般庶民の商用や観光を目的とする移動が盛んになりました。また、天災や飢饉が起ると、生活の困窮から住んでいた村を離れて流浪する者も多く出ました。これらのことから、旅の途中で行倒れとなる人の数が増加し、行倒れ場所の人々は対応に苦慮することになります。

行倒人に関する幕府の法令が最初に出されたのは、元禄元年(1688)10月19日のことです。道中奉行から宿場あてに出されたこの法令は、行倒人をすぐに隣の宿場に送ることを禁じ、その場所で看病することを命じたものでした。前年の貞享4年正月には、病牛馬と病人の遺棄を禁じた法令が出ていますが、これらの法令は「生類憐みの令」の一環をなすものです。人間が牛馬と同等に扱われ、犬や鳥類の後手に回るということに、現代の私たちは違和感を覚えるかもしれません。しかし、江戸時代前期の社会において、他所者で労働力にならない行倒人(病人)や捨子は、保護すべき存在だとは考えられていませんでした。悪名高い「生類憐みの令」ですが、これら社会的弱者の救済を命じていることは、評価すべきことです。

その後行倒人に関する法令は、元禄2年3月、同8年9月、享保18年(1733)5月、同20年6月に出され、それらの総括ともいえる法令が明和4年(1767)12月に出されます。

当館に寄託されている大國魂神社(江戸時代の六所宮)文書内の、神主猿渡氏による日記や公用記録には、六所宮の社領八幡宿村での行倒人に関する記録が残っています。幕府の法令をうけて、八幡宿村ではどのような行倒人対策をとっていたのでしょうか。ここで少し紐解いてみましょう。

行倒人発見!!

八幡宿村は府中新宿の東に位置し、六所宮の社領でした。武蔵の総社であった六所宮には多くの参拝者が訪れ、しばしば行倒人が出ましたが、これに対処するのは八幡宿村でした。

下の表は、大國魂神社文書に記載された八幡宿村における行倒人対処の記載を一覧にしたものです。1700年代の後半にはじまり、文化年間には7件もの事例が見受けられます。

このように、行倒人がしばしば現れると、その

八幡宿村における行倒人

年月日	場所	状態	検使	身元
安永7年(1778)6月2日	六所宮大門先	死亡	無	判明(廻国の者)
天明4年(1784)1月22日	八幡原	死亡	有	不明
天明5年3月13日	六所宮随神門	病人⇒死亡	有	不明
天明5年6月2日	馬場	病人⇒死亡	無	不明(無宿)
寛政12年(1800)6月21日	八幡宮脇	病人	有	判明
寛政12年12月5日	八幡山	死人	無	判明(六部)
文化7年(1810)2月23日	八幡原畑中	死人	無	不明→判明
文化8年4月25日	六所宮御旅所側	病人	無	判明
文化10年5月18日	六所宮泉蔵寺前	病人	無	不明(乞食体)
文化10年8月11日	六所宮宮之咩拝殿	病人	無	不明(比丘尼)
文化11年7月18日	天地下水汲場	病人	無	判明(諸国順拝者)
文化12年8月18日	六所宮御旅所	病人	無	判明(金比羅参詣者)
文化13年10月20日	馬場	病人	無	不明(乞食体)
文政13年(1830)6月18日	甲州街道往還端	病人⇒死亡	有	不明
安政5年(1858)4月1日	六所宮鳥居前往還	病人⇒死亡	有	不明

村はたまったものではありません。数日の療養で回復するならまだしも、長期療養や死亡者の埋葬により村にかかる負担は甚大です。かかった経費もすべて背負わなければなりません。このため、隣村へ行倒人を運んで放置する村もあり、訴訟に発展することもありました。村境に倒れていた場合、どちらの村が引受けるかも問題です。江戸時代後期の捜査手引書には、「昔は顔を上に向けて倒れていれば頭の方で、顔が下の時は足の方で引受けた。今はすべて足の方で引受けるが、男は左足、女は右足のあるほうで引受ける」と記されています。行倒人の足が村境をまたいでいた場合のルールまで定めているのです。

さて、行倒人を発見したら、発見者は直ちに村役人に知らせます。村役人は現場へ出向き、行倒人に不審な点がないか検分し、支配役所へ事件の経緯を届出ます。

検使が村にやってくる？

行倒れや変死、火事、捨子等の際の吟味役を検使といいます。検使は、行倒人を発見した村から検使願が提出されると、支配役所から派遣されます。八幡宿村は神社領ですので、本来寺社奉行の支配下にありますが、府外（江戸の境界線の外）であることを理由に府中宿の支配代官へ願い出ることが通例となっていました。

検使は役所から事件の捜査のために派遣される、いわば警察官や検死官のようなものです。今日の感覚では、すべての行倒人の調査をするように思いますが、八幡宿村の事例を整理してみると、検使が派遣されている場合といない場合があることがわかります（表参照）。この違いはどこから生じたものなのでしょうか。

文化7年2月23日、八幡原の畑で死亡した行倒人が発見されました。当初身元が不明だったため検使願を出しましたが、翌日身元が判明。行倒人の親類が代官所に吟味の取下げを願い出ました。結果、検使は派遣されず、遺体は親類が引き取り一件落着となりました。

寛政12年6月1日の八幡宮脇の行倒人は、国元に知らせたところ、帳外（人別帳から除外されること）になった者なのでこちらとは関係がないと言われたため、検使願を出しました。これに対し代官所からの返答は、「行方不明の届出から6ヶ月未満で、まだ帳外者にはなっていないから検使の必要はない。国元に引き取らせるように」というものでした。

これらの事例から、身元が判明し、親類などの引取人がいる場合は、検使の必要がなかったことがわかります。表に記載した他の事例でも、身元判明者には検使が行われていません。もちろん、支配役所への報告は必要ですし、村役人の検分で怪しい点が見つかれば、検使願を提出しなければなりません。しかし、身元が判明した場合の事件性の有無は村役人の判断に任せられ、その後の対処は引取人との相談で決めることができたのです。なお、身元不明者でも無宿や乞食のような風体の者には検使が行われませんでした。

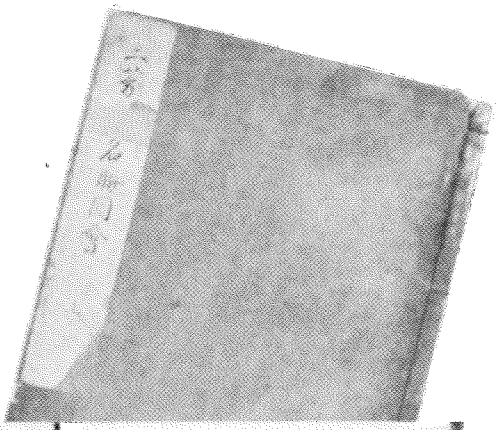
これらのことから、行倒人への対処方法は、身元が明らかになるか否かに大きく左右されるといえます。身元を当人に直接確認できればよいのですが、会話不能の重病人もいれば、すでに息絶えている者もいます。その際役立つのが往来手形を含む所持品です。往来手形には名前と国元が記されています。ここで身元が判明すれば一安心のはずですが、偽りを述べる病人もいるので、まだ安心はできません。文化8年4月25日に六所宮の御旅所脇に倒れていた病人は約1ヶ月間八幡宿村内で療養した後、本当の身元を告げていなかったことが判明。仕方なく検使願を出し、病人の特徴を記した立札をたて情報を募ったところ、7月になってやっと親類だと名乗る者が引取りにきました。八幡宿村では長期間病人の面倒をみた上に、この引取人に養育料として1両を渡しています。八幡宿村としては一刻も早く村から送り出してしまいたかったのでしょう。

このように、身元が判明しても何か問題が生じた場合は、検使願を出さなければなりません。願書提出のための江戸への往復だけでも大変ですが、検使が到着すると宿泊場所から食事の用意まですべて賄うことになります。

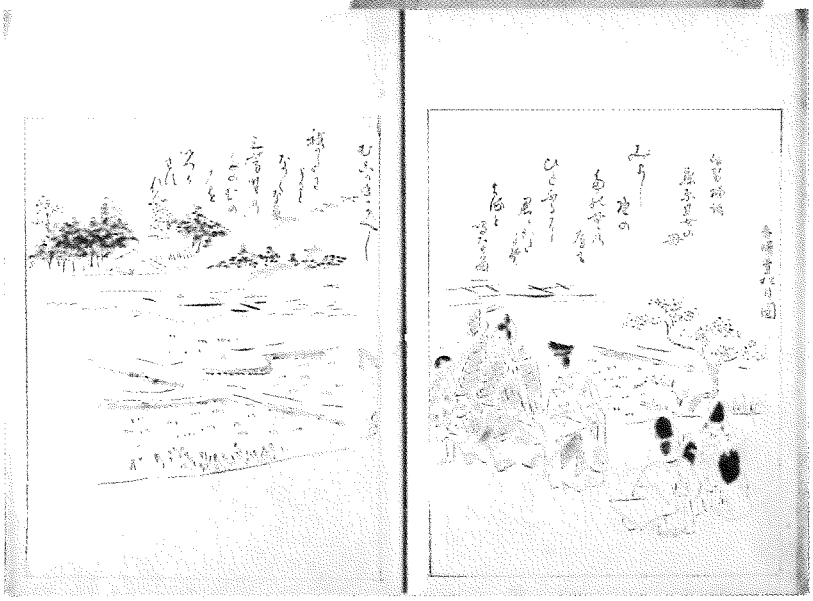
検使は行倒れの現場を検分し、発見者や村役人などを吟味し口書（供述書）を作成します。そしてその後の指示を出して帰府しますが、この間にかかる費用は莫大です。八幡宿村ではこの多大な支出にどのように対処していたのでしょうか。また、行倒れた病人をどこで療養させ、死亡した場合の埋葬はどうしていたのでしょうか。

それはまたいずれ……

収蔵庫のニューフェース



武蔵三芳野名勝図会（写本）
購入資料



江戸時代には地域の名所旧跡を紹介したガイドブックが数多く作られましたが、江戸近郊の「武蔵野」の一部を扱った珍しい地誌の一つを当博物館はこのほど入手することができました。城下町・河越（埼玉県川越市）の名主・中島孝昌が地元についてまとめた『武蔵三芳野名勝図会』です。『都名所図会』や『大和名所図会』が評判を呼んで間もない頃で、『江戸名所図会』が刊行されるより30数年も前、享和2年(1802)に本書は著わされています。しかし刊行はされず、数種の写本が知られているだけでした。

「三芳野」は、平安時代の『伊勢物語』に「入間の郡みよし野の里」と出てくる地名のことです。後世にこの「三芳野」は河越付近だと考えられるようになりました。本書の冒頭で掲げられる挿絵（写真下）は、この『伊勢物語』の場面を想像して描いたものです。「東下り」をした主人公は、「三芳野」に住む娘と通じましたが、その母親と交感の歌を詠みあいます。「みよし野のたのむの雁もひたぶるに 君がかたにそ よると鳴なる」「我かたによるとなくなる 三芳野のたのむの雁をいつかわすれん」。

本書には、ここにしか見られない興味深い伝承の類も掲載されています。例えば、「武蔵野の堀兼の井」（狭山市）に出現した亡霊の話。河越から鎌倉将軍に献上する鯉を誤ってこの井戸に落として誅せられた使者の亡霊だったというのです。中世における鎌倉街道の交易ルートの存在を感じさせる説話です。

河越の連馨寺の門前にかつてあった榎の古木についても紹介されています。この木は、「武蔵野の北の境の印の榎」だったと言うのです。江戸郊外に広がる広大な「武蔵野」のエリアに境界が認識されていたのです。ちなみに『広辞苑』で「武蔵野」の項目をひくと、「埼玉県川越以南、東京都府中までの間に拡がる地域」などと説明されています。当時、河越には「府中道」が、府中には「川越道」が通じていました。府中あたりには、「武蔵野」の南の境の標識があったかも知れないなどと想像してみたくなります。本書は、「武蔵野」の歴史・文化・地理を考えていくうえで欠かせない史料の一つです。

最近の発掘調査

解明進む国司の館

本町二丁目　府中市教育委員会　和田　信行

四面に廂の付く大型建物跡　（人の立っている所が柱の穴）

つい先日まで開催していた特別展「発掘！府中の遺跡」でも紹介しましたが、今回は発掘が進む「国司の館」が話題です。

「国司の館」が見つかった場所は、ＪＲ府中本町駅の西方約150m、府中市本町２丁目です。この場所は、立川段丘下の多摩川の沖積地に立地し、市史跡武蔵国衙跡の南西約500mにあたります。

これまでの発掘調査では、四面廂付の大型の掘立柱建物群とそれを区画する大型の溝が発見されていました。さらに、竪穴建物跡から近畿地方で作られた緑釉陶器（9世紀前半）がまとまって出土していることや「大館」と墨書された須恵器坏が出土していることなどから、「国司の館」推定地として注目していました。

今回新たにその西側で大規模な発掘調査が行われ、この「国司の館」の続きが発見されました。区画溝の曲がる部分は調査できていませんが、直角に曲がると考えられる溝の内側からは、9世紀中頃の遺物が出土しました。この溝が以前調査した溝とつながると想定した場合、区画の規模は、南北は不明ですが、東西は約76mになります。区画内では、竪穴建物跡・掘立柱建物跡などが発見されており、特に区画内で見つかった掘立柱建物跡は、東西長約12.5ｍ以上、南北長約8.4mの大型の建物跡です。柱の間の距離がほぼ9尺（2.7m）で、四面に廂が付く建物と考えられることから「国司の館」を構成する主要な建物のひとつであったと考えられます。

その他にここでは、「国司の館」の北側で東西方向の大溝が発見されました。最大幅は約11m、最大底面幅は約6mもあります。長さは調査地区内で約69mあり、さらに東西ともに延びています。この中からは多量の土器が出土し、砂などの堆積物により水が流れていたと思われることから、運河の可能性が考えられます。

今回の調査により、国司館の具体的な姿が明らかになってきました。他国の国司館では、文献史料により酒宴が催されていたことがわかっています。武蔵国の場合もそのような情景があったのでしょう。今後、区画南側の様相や南北規模が明らかになることが望まれます。

「大館」の墨書土器（1995年出土）

都から派遣された国府の役人（守・介・掾・目）を国司といいます。その住宅が「国司館」です。「大館」の墨書土器は、武蔵国府で一番大きい館の意味と考えることができます。そうであるならば、国司の中でも筆頭の守の館と推測されます。

リニューアルトピックス

―展示室再生―

さらに市民に愛される
郷土の森博物館をめざして

⑧ まずは「祭」コーナーから― -4

リアルタイムな「くらやみ祭」と博物館

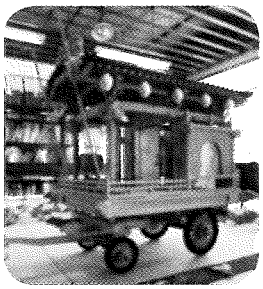
この4月、本館常設展示室の「くらやみ祭」コーナーがいよいよリニューアル・オープンします。開館してから20年。数百年の伝統を誇る「祭」自体もこの間に変化し、博物館では毎年取材を繰り返し、新たな資料の発掘や調査も行ってきました。新しい展示では、そうした成果を踏まえ、「祭」の現在をとらえ、その歴史を顧みて、そして「祭」を支える多くの人たちに学びながら、「祭」の将来、コミュニティとしての府中の街の将来をも見据える手がかりの場にしていきたいと考えます。 ↗

新「くらやみ祭」コーナーは、「祭」の全体像に迫る大型ハイビジョン・マルチ映像を上映する円形ステージを中心に、現役を降りた神輿と太鼓、1/10模型の山車、万灯、囃子の用具などが並びます。「くらやみ祭とは」「くらやみ祭の次第」「くらやみ祭の歴史」「くらやみ祭を支える人々」の各コーナーに分けられ、中世に遡る「祭」の初見資料や、「祭」に関わる20数名の声がインタビュー映像で紹介されます。 ↙

にぎやかに万灯作り

この展示造作のためにたいへん多くの市民・関係者の協力をいただいたことは言うまでもありません。調査や取材への対応はもちろん、万灯については、万灯大会を主催する青年大祭委員会の呼びかけに応じて、各町青年会の50～60名が毎週夜に博物館に集まり、新作したものです。山車模型の製作にあたっても多くの方との調整がありました。21台のなかでの1台の選定、当初の製作時における経緯や設計図などの資料調査、模型に付随する77名の人形についての検討などです。老若男女、4種の半纏を着用し数種の提灯を手にする人物群は、それぞれの役割分担と力関係を反映し、あるべき姿と実状の間にも揺れ、まさに山車を中心とする町内のコミュニティを反映したものです。

こうしてオープンに向けての最後の準備をしている間に、ほんものの5月の「くらやみ祭」も近づいてきました。大國魂神社では「大祭委員会」による「大祭会議」が2月19日に開かれ、各町内の「提灯しらべ」「講中まわり」「半纏合わせ」などと呼ばれる準備の集まりもあちこちで行われました。郷土の森博物館「梅まつり」最中の3月9日には、展示予定の神輿が、今年も地元の人たちによって園内に担ぎ出されました。



製作中の
山車模型

※あるむぜお　イタリア語で【博物館で】【博物館にて】の意

府中市郷土の森博物館だより〈あるむぜお〉No.83 発行日 2008/3/20
編集・発行（財）府中文化振興財団 府中市郷土の森博物館
〒183-0026 東京都府中市南町6-32 TEL 042-368-7921
http：//www.fuchu-cpf.or.jp/museum/